

【博士論文】

## 宗教の定義——認識という観点から——

平成 30 年 9 月

広島大学大学院総合科学研究科

高山善光

### 【要旨】

本論は、これまで言語論的転回の影響下において研究されてきた、近代的な「宗教」概念の定義の問題を、認識という観点から解決を試みたものである。従来「宗教」は、祈りや儀礼などによって構成されている、人類に共通する普遍的な現象だと考えられてきた。しかしすでに、「宗教」という概念は普遍的なものではなく、所謂近代以降に出現した概念であるということが明らかにされている。普遍的なものだと考えられてきた「宗教」が、実は近代の産物であったということは、少なからず現在の研究者たちに混乱を与えている。この近代の産物としての「宗教」は、従来われわれが想定してきたように、何らかの現象を指しているのか、もしそうでないとなれば、何を意味しているのかという問いは、現在の研究者たちを悩ませる大きな問題の一つである。「宗教とは何か」、これが本論で追究する問題である。以下に概要を述べる。

- 第一章 なぜ、これまで宗教とは何かに答えることができなかったのか——「宗教」の非現象的性格
- 第二章 宗教の判断基準
- 第三章 宗教とは何か——宗教的観念をつくる認識
- 第四章 呪術とは何か——呪術の定義と宗教的認識
- 第五章 世俗と宗教——二つの知識の正当性

第一章と第二章は、「宗教」の定義に関する先行研究の分析を主としている。第一章では、宗教概念に関する諸研究をまとめ、「宗教は普遍的な現象を指す概念ではない」と指摘する研究者の中にも、実は「宗教は普遍的な現象を意味している」という、従来の考えが残存していることを示した。宗教学者（概念研究者・批判者を含む）の多くが未だにこの旧来の考えを（批判しつつも）踏襲しており、この思い込みのために、これまで「宗教とは何か」を解明することが困難だったと論じた。従来の幅広い宗教学者の論考を網羅的にまとめ、「宗教」の共通の定義を見出すためには、この思い込みを排して研究する必要があると結論付けた。

第二章では、この「宗教は普遍的な現象を意味している」という思い込みを離れて、宗教概念の問題を解決するためにはどうすればよいかを考察した。具体的には、「宗教」だと判断される事例とされない事例を渉猟し、何が「宗教」だとされているのかを論じた。そしてその中でも、ある書籍や自然物が宗教的観念化するという事例に注目した。その結果として、「宗教」は所謂宗教現象と関係がなく、ある対象を宗教的観念化したり、神や魂といった宗教的観念自体を成立させている、「特殊な認識の仕方」にかかわりがあるのではないかという結論に至った。

第三章では、この「特殊な認識の仕方」がどのようなものであるのかを考察した。たとえば、太陽を宗教的対象と認識している人は、どのように太陽を宗教的観念化しているのだろうか。ここでは、上記の「特殊な認識の仕方」が、「統化的帰納」という一種の論理形式を有しているということを論証した。またこの章では、この「統化的帰納」によって神や魂といった宗教的観念の成立とその信憑性の源を説明できることを示し、「宗教とは、この統化的帰納の形式をもつ認識のことだ」と定義した。「宗教とは何か」に対する新しい考えを提出した。

第四章とその補論では、この「統化的帰納」の理論の妥当性を、「呪術」に適応して論じることで裏付けた。従来呪術の理論では、「類似」や「隠喩」といった認知機能が重要な役割を果たしていた。しかし認知科学の発展によって、現代では、これらを呪術や近代以前の知の体系のみの特徴として考えることはできないと指摘されている。補論で示した通り、呪術の特徴は、非呪術的な人々にとっては単に人間の頭の中の、主観的な結びつきである「類似」的な推論（例：太陽は目である/Iに似ている）が、自然を記述する実質的・現実的な関係として受け取られているという点に求められる。本章は、この「類似」が実質的な意味を持つという考えは、上記の「統化的帰納」の観点から解明されるものであるということを示した。また、「呪術」を「統化的帰納の認識が推論に作用している（と判断されている）もの」と定義して、新しい呪術理論の展開を試みた。「呪術」が宗教的であると同時に科学的でもあるというのは、呪術研究の大問題の一つであったが、その解決も、本章で試みられている。「宗教」と「呪術」が明確に区別されることによって、上記の「宗教」の定義が妥当であることを示した。

第五章では、最後に、「呪術」を含む「宗教」が「世俗」とどう異なっているかについて論じた。これを示すために、本章では、両者の世界観を構成している知識の正当性に注目した。理性と信仰を分析の対象にしたのは、このためである。われわれがある対象を信仰するためには、その対象が一定の正当性を有している必要がある。自分でも間違っていると確信しているものを、信仰の対象にするわけにはいかないからである。上では、「宗教」的知識（観念）が、統化的帰納の形式を有する認識によって形成され、正当化されていることを示して「宗教」を定義した。この信仰の対象が有する正当性は、この統化的帰納の認識によっていることを示した。本章では、これに対し、非宗教的な、世俗的な知識が、人間の明示的な推論の力によって正当化されていることを、歴史的な考察を通して見ることで示した。「宗教」と「世俗」は、この知識の正当性という点で明確に分けられるのである。しかし一方で、第二章で論じたように、「宗教」が「世俗」と判断され、また逆もあり得るという問題がここにある。この問題に対し、本章では、たとえ研究者が宗教的観念だと判断するものであっても、その知識の理解者が、それを明示的に論証されている知識であると考えることがあり、あるいは逆に、論証されたものでも根拠が不明だと考えられることがあると論じ、その解決を図った。知識の生成の場面では、その根拠が何によって提供されているかによって「宗教」と「世俗」を明確に分けることができても、その受け取り手に注目した時、それが様々に受け取られているために、この区分があいまいになってしまうのだ。「宗教」を、現象を指し示す概念ではなく、認識を指し示す概念だと考えることで、これまで解けないと考えられてきた「呪術」と「世俗」の問題を、ここに解くことができた。

本論では、「宗教とは何か」という問題を考察した。そして「宗教」とは統化的帰納の形式をもつ認識のことだという結論を得た。この定義の妥当性は、従来境界線が不明確だとされてきた「呪術」そして「世俗」との区別が、この宗教の定義に基づけば明瞭に説明されることを論じて見せたことで、示すことができた。